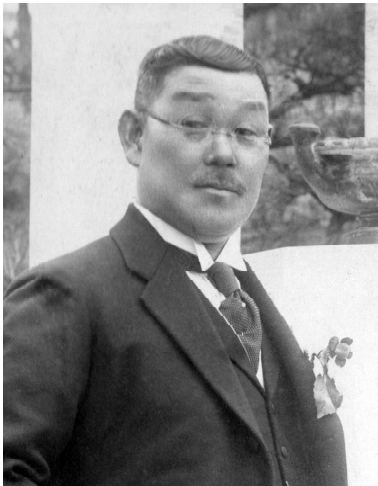


すず き てい じ
鈴木禎次

時代を洋風建築で表現
—名古屋をつくった建築家—



鈴木禎次 (1870 ~ 1941)

写真：名古屋工業大学提供

■生い立ちと建築作品

鈴木禎次は1870(明治3)年に静岡で生まれた。父、利享は旗本の家柄であり、当時、徳川慶喜の駿府行に随行し、東京からこの地に移住していたが、後に家族とともに東京に戻る。帝国大学造家学科(現在の東京大学建築学科)を1896(明治29)年に卒業すると、大学院に残り、鉄骨耐震構造を研究する。これが縁で帝大先輩の横河民輔に請われて三井銀行建築係に就職し、三井本店、三井大阪支店などの設計を通じて実務を学ぶ。その後3年半に及び欧州留学を終えて、1906(明治39)年、36歳のとき、新設されたばかりの名古屋高等工業学校の建築科教授として赴任する。留学と赴任は東大恩師辰野金吾の指示であり、これが鈴木と名古屋をつなぐ始まりである。教鞭をとる傍ら建築設計活動を始める。赴任後最初に設計した鶴舞公園噴水塔・奏楽堂、愛知県商品陳列館では、設計に教え子の鈴川孫三郎・桃井保憲・星野則保(第1回卒業生)が協力している。53歳のとき退官して名古屋における草分け的存在となる鈴木建築事務所を

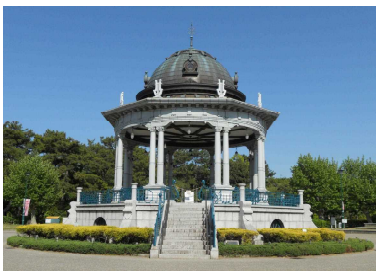


名古屋工業大学構内にある鈴木禎次記念碑

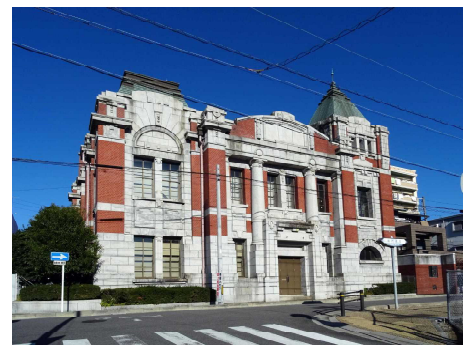
開設し業務に専念する。約80の生涯建築作品は三大都市圏を中心に分布しており、うち44棟は名古屋市内にある。様々な洋風様式を取り入れた銀行、百貨店、事務所といった建物を多く残す。しかしこの華やかさも晩年には戦時色が濃くなり、装飾のない機能性重視の工場風の建築となる。1941(昭和16)年逝去。建築界では彼を称えての鈴木禎次賞が設定された。また、鈴木禎次は夏目漱石の義弟でもあり、漱石葬儀の総括責任者も務めている。

■名古屋を舞台に時流に乗り、東海建築界で重鎮となる

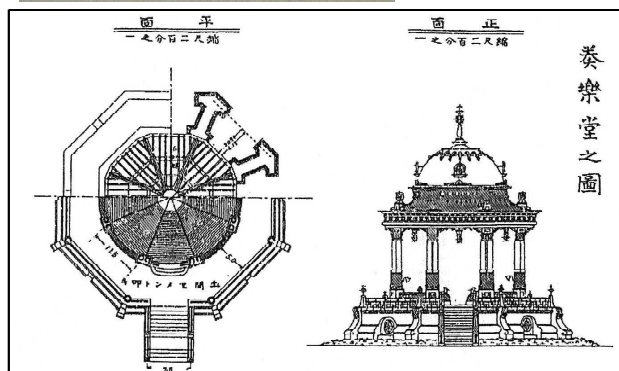
明治維新直後、江戸時代の御三家の城下町という繁栄からしばらく遠ざかっていた名古屋であったが、明治から大正期においては、近代的大都市に変貌しようとしていた。近代化を図る上で建物の近代化は最も効果的である。建物は生活の舞台であるとともに、わかりやすい都市のシンボルでもある。木造構造主体の当時、斬新な西洋意匠を取り込むことは必須であるが、特に大勢の人が出入りする建物では、耐震を向上させることも要望されていた。当時の名古屋において、これらに精通していた建築家は限られていた。鈴木禎次は辰野金吾周辺の建築家仲間、伊藤祐民、奥田正香ら多くの地元有力者からの支持を得て、



またこの時代をリードする博覧会での重要な役割を果たしたこともあって、この地域の洋風建築の主要建物はほとんど一手に設計するようになる。作品には時代の流れと顧客のニーズを満足させるための様々な創意工夫が随所に見られる。当時の名古屋においては、鈴木禎次ほど建築家として自己の能力を発揮できる機会を得た人物はいない。



旧岡崎銀行本店(現・岡崎信用金庫資料館)



鈴木禎次が設計した鶴舞公園の奉楽堂

出典：『第十回関西府県連合共進会事務報告』

鈴木禎次の主な建築作品

名古屋市内では、いとう呉服店(1910)、愛知県商品陳列館(1910)、鶴舞公園噴水塔・奏楽堂(1910)、共同火災保険名古屋支店(1913)、三井銀行名古屋支店(1913)、北浜銀行名古屋支店(1915)、名古屋商業会議所(1923)、淑徳高等女学校(1929)、揚輝狂伴華楼(1929)、豊田喜一郎邸(1933)、松坂屋本店(1925、1936増設)、日本陶器工場及び事務所(1937)、名古屋製陶鳴海工場(1938)、東邦瓦斯熱田工場(1939)など。この他、名古屋市以外では、中埜半六郎(1911)、岡崎銀行本店(1916)などがある。

(藤田秀紀)